

氏名	関野 明子 (セキノ アキコ)
本籍	神奈川県
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博甲第 123 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	別居介護における課題とそれへの対応 ―家族介護者を対象とした同居介護との量的比較と別居介護のプロセスの研究から―

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	中谷	陽明
	(副査) 桜美林大学教授	杉澤	秀博
	桜美林大学教授	長田	久雄
	お茶の水女子大学名誉教授	藤崎	宏子

論文審査報告書

論文目次

第一章 序論

1-1 別居介護の増加.....	1
1-2 別居介護支援の必要性.....	2
1-3 先行研究.....	3
1-4 別居介護における距離の定義.....	5
1-5 本研究の目的と意義.....	6
1-6 本研究の構成.....	7

1-7 本研究における用語の操作的定義.....	8
第2章 認知症高齢者の別居介護と同居介護における背景要因	
および家族介護者の介護負担感に影響を与える要因の違い	
2-1 目的.....	9
2-2 方法.....	10
2-3 結果.....	14
2-4 考察.....	17
2-5 本研究の限界.....	23
2-6 結論.....	23
第3章 家族介護者が別居介護を継続していくプロセスと	
施設入所を選択していくプロセス	
3-1 目的.....	32
3-2 方法.....	33
3-3 結果.....	34
3-4 考察.....	72
3-5 本研究の限界.....	89
第4章 総合考察	
4-1 本研究の特徴.....	93
4-2 本研究で明らかにされた知見.....	94
4-3 支援に向けた Implication.....	99
4-4 本研究の限界と今後の展望.....	105
謝辞	
資料	

論文要旨

本論文の目的は、近年別居介護が増加する傾向にあることを踏まえて、別居家族介護者がたどる家族介護プロセスの内容と特徴を明らかにすることである。より具体的な研究課題としては、家族介護は同居介護と別居介護でどのような違いがあるのか、別居家族介護者はどのようなプロセスで別居介護を継続しているのか、どのような状況が別居介護を断念する転換点(Tipping point)となるのか、といった3点が設定されている。本論文の意義として、これらの課題を明らかにすることを通して、別居介護の全体像を包括的に把握すると共に、別居介護家族が置かれている状況に見合った、適

切なタイミングでの効果的な支援の視点を獲得できることが述べられている。

本論文は、家族介護者へのアンケート調査とインタビュー調査で構成されている。アンケート調査の目的は、認知症高齢者の別居介護と同居介護の背景要因および家族介護者の介護負担感に影響を与える要因の違いを明らかにし、同居介護とは違う別居介護の特徴について検討することである。全国の通所系介護サービス事業所、訪問介護事業所を利用する家族介護者を対象に 6,203 件の自記式調査票を配布し、回収した 2,358 件の調査票を、分析目的に応じて 300～1,385 件を対象に分析を実施している。研究の理論的な枠組みとしては、介護者の負担についての研究において蓄積されてきたストレスプロセスモデルを援用し、そのモデルで使用されている概念から調査項目を作成している。主たる知見として、以下のものが示されている。別居介護は同居介護に比べて、男性が多い、介護者・要介護者ともに年齢が低い、続柄は娘が多い、介護期間が短い、要介護 1 が多く要介護 3 が少ない、正規雇用が多い、介護離職した者が少ない。別居介護者は同居介護者に比べて、精神的負担感が低く、相談先が有る方が精神的介護負担感が高くなりにくい。また、最初に利用した介護保険サービスが多い方が、介護負担感が低くなりやすく高くもなりやすい。さらには、距離の違いや通う頻度は、精神的負担感に影響を与えていない。

インタビュー調査は、別居介護者が別居介護を継続していくプロセスと施設入所を選択していくプロセスを明らかにすることを目的としている。調査対象者として、地域在住認知症高齢者の別居家族介護者 20 名を機縁法にて選定し、対面またはオンラインでの半構造化面接でインタビューを実施している。インタビュー内容は、別居介護が始まってから今までの経緯、別居介護をされていて不安や負担に感じる事、別居介護をされていて良かったと感じる事、将来の見通しなどで、現在施設介護である介護者には、施設介護を選択した経緯等である。分析方法は、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いている。プロセスを説明する【突然の介護役割発生】、【垣間見る高齢者の生活の乱れ】、【別居介護開始時期の混乱】、【別居介護の安定化を図る】、【様々な条件のめぐり合わせ】、【別居介護継続意欲の芽生え】、【別居介護継続不安の臨界点を越える】、【より良い生活環境を求めての施設入所】、【別居介護負担からの解放とトレードオフ】といったカテゴリーを生成し、別居介護のプロセスは、循環的なプロセスを何巡かしたのちに、別居介護の安定化が上手く図れずに、その循環経路から外れて施設入所に至るという螺旋的循環構造であることを図示したストーリーラインを提示している。

2つの調査からの総合的考察においては、別居介護と同居介護でのいくつかの違いが明らかにされたこと、別居介護を継続していくプロセスと、施設入所を選択していくプロセスが明らかにされたことと共に、別居介護を断念する転換点として、【別居介護負担感の臨界点を越える】と【高齢者の安全確保の危機】が重なった点が見出されたことが示されている。また、研究結果からの Implication としては、別居介護の延長線上には介護形態の再選択がある可能性が高いことを前提に、別居介護をより長く継続させることが支援の目的にならないように留意すること、高齢者やその家族が納得して選択できるような支援を続けて行くことが述べられている。最後に、本論文の

限界点と課題についての諸点も示されている。

論文審査要旨

現代のわが国において喫緊の課題である要介護高齢者の家族による別居介護を取り上げている点について、未だ別居介護にかんする実証的研究が数少ないという現状を鑑みても、十分に独創的な論文であり、その社会的意義も高い。さらに研究手法として、自記式調査票を用いた大量データの収集からの分析を試みるとともに、詳細なインタビューによる質的データからの分析を加えている。量的データの分析においては、介護ストレス研究で汎用されているストレスプロセスモデルに依拠して、別居介護者の介護負担感の関連要因の特徴を、同居介護との対比で解明しようと試みており、十分に独創性がある。さらに、大量データを駆使した要因間の交互作用の分析においては、いくつかの興味深い知見が見出されている。質的データの分析においては、膨大なインタビューデータからの分厚い記述が示されている。分析は、長期的な介護プロセスの把握を試みており、別居介護の継続意思の再確認や断念の転換点になりうる出来事や状態、および対処の様態の一端を明らかにした点、さらにその成果を同居家族介護に関する先行研究との知見と対比させることで、相対化しつつ論じている点は高く評価できる。以上のようなことから、審査委員全員一致により、博士学位請求の論文としての水準は、十分に満たしていると判断された。

加えて、博士学位請求論文としては合格点に達してはいるが、学術論文としての課題が散見されるため、口頭審査において質疑応答をする中で、それらの課題への意見あるいは対応等について確認することとした。

口頭審査要旨

本論文において、学術的に課題と思われる諸点について、質疑応答を行った。まずは、別居介護を対象にしているが、別居の距離についての操作化などが不十分ではないのかという点については、本論文では、客観的な距離よりも主観的な距離感を重視して研究枠組みを考えたという回答であった。また、本論文は、その作成過程において当初は認知症高齢者の家族介護者に焦点をあてた別居介護の分析を試みていたが、その後広くより全般的な要介護高齢者の家族介護者の別居介護に論点を移してきた。そのことにより、むしろ認知症高齢者の介護についての特徴的な知見や考察が若干弱くなっているのではという指摘を行った。それに対しては、本論文の知見や考察は、一般的な家族介護を前提に論じているが、記述の中では認知症高齢者の介護についてもかなり言及している。ただし、その部分が少し埋もれてしまったことは否めないもので、今後は認知症高齢者の家族介護者の別居介護に焦点を絞った研究を進めていく意義は十分に理解しているという回答であった。

以上のように、口頭審査における質疑応答は、概ね満足の行くものであった。論文については、さらなる改良の余地は残されているものの、その点は今後の研究課題として再認識してもらうこととした。以上から結論として、本論文が博士学位請求論文として合格であることを、主査・副査の全員の合意によって確認した。